

哲学対話における「問い」の難しさについて

On the difficulty of the “question” in philosophical dialogue

馬場 智一（長野県立大学グローバルマネジメント学部）

【要旨】

哲学対話で問いを挙げることにはある種の難しさがある。本稿は、この難しさが何に由来するのかを明らかにする。「問い」という言葉の多義性に加え、「問い出し」に対する抵抗感や、問いを共有して対話するという想定自体の難しさがある。問いについてのある種の思い込みが、本来哲学の入り口になりうる問いを排除してしまうこともある。哲学の始まりになりうるのは、世界にたいする驚きだけでなく、懐疑や苦悩などのパトスから発せられた問いである。

There exists a certain difficulty in raising a question to share in philosophical dialogue. This paper tries to search reasons why it is difficult: The word “question” is multivocal, some are reluctant to raise a question, some others don't understand how to conduct a dialogue about a shared question. A certain kind of “doxa” people have about the philosophical question may exclude questions which could be a door to philosophizing. Not only a question brought about by surprise, but also that lead by doubt and torment can be a beginning of philosophy.

【キーワード】

問い、多義性、問いの共有、ドクサ、こども、若者、大人、驚き、懐疑、苦悩、限界状況、交わり

Question, multivocality, sharing of questions, doxa, children, young, adults, surprise, doubt, torment, limit situation, communication

1 はじめに

筆者は哲学カフェおよび中学校・高校を中心とした哲学対話の授業、教員向け研修、シニア向け哲学対話講座などで、哲学対話を実践している。機会に応じて実施方法は様々だが、テーマに沿った問いを参加者に出してもらい、それを一つに絞り込み、選ばれた問いについて、一定のルール（ないし心構え）の元で対話をし⁽¹⁾、最後に新たに浮かんだ疑問（お土産）を出すという点は、実践するほとんどの対話に共通している⁽²⁾。

哲学対話を他の様々なコミュニケーションから区別する大きな特徴の一つは、共有された「問い」を中心に対話がなされる点である。筆者は初めての参加者に、哲学対話は問いに始まり問いに終わる活動だ、と説明している。この時、「問い」という表現に戸惑い、「問い」を出すことがいかなる行為なのかが伝わらないことが多い。筆者は、初めての参加者には、おおよそ次のように説明している。

哲学対話とは、日常的には改めて考えることのない当たり前のことをテーマにして、テーマに関する「問い」を出発点に、参加者が、幾つかのルールや心構えを共有したうえで、自由に話し、質問し合い、聞き合い、考えを深めながら、新たな疑問を発見する対話です。哲学の専門的な知識は必要ありません、むしろ参加者が自身の経験をもちより、互いに質問しあうことで、対話が深まってゆき、新たな問いが生まれます。まずは出発点となる問いを出します。「〇〇について」がテーマだとすれば、問いとは「〇〇」に関連する疑問文です。例えば、「時間について」がテーマだとすれば、「時間はなぜ早くすぎるのか？」は問いです。「問い」を考える際には、かならず「疑問文」で表現してください。

このような説明をしても、また、共通体験があったとしても、「問い出し」作業がすんなりと進まないこともある。後述する様々な反応は、対話に慣れ、「問い出し」という作業がもはや自分には自明になっている事実を筆者を直面させ、改めて「問い」とは何なのかを考えさせないではおかない。幸い、近年日本では哲学対話入門書が増えてきている。各書に共通しているのは、質問の仕方や問いの出し方についての充実した記述である⁽³⁾。しかし、問いを挙げることの難しさが主題的に扱われているわけではない⁽⁴⁾。この欠落を埋めるべく本稿は、「問い」を挙げることの難しさは一体何に由来するのか、という問いに答えることを試み、困難を解消するために、哲学観を拡張することを提案する。

以下では第一に、この難しさの言語上の原因とその種類について分類・整理する。「問い」を挙げることの難しさが、「問い」という言葉の多義性、及び問うこと自体に対する戸惑いや反発、さらに「問い」を共有するという共同行為自体の理解しがたさに由来することを論ずる（2. 問題の分析）。第二に、参加者とファシリテーター（実践者）双方が抱き得る問いについての思い込みもまた、その原因となりうることを主張する（3. 「問い」についてのドクサ）。最後に、この思い込みがどのような哲学観に基づいているのかを明らかにし、哲学観の拡張をヤスパースの所論に依拠しつつ提案する。（4. 哲学対話における問いとはなにか）。

2 問題の分析

本節では、「問い」のもつ難しさおよびその原因を分類し、問題を整理してみたい。まずは「問い」という言葉が持つ三つの多義性について整理する。そのうえで、問い出しに対する三つの障壁を論じる。

日本語の「問い」には、辞書的には、「質問すること」、「試験などの問題」という意味がある。さらに、「問い」は疑問文で表されることから、ある事実の真偽について「疑う」こととしても理解される。したがって、「問い」を挙げて下さいと言うときには、それが「問題」、「質問」、「疑問」のどれなのかが判然としない。

まず「問題」(problem)は、解決すべき課題のことである。「どうすれば地方の人口減少を食い止めることができるか」は問いであるが、これは政府や地方自治体が行っている課題、問題であり、具体的な解決策を回答として求めている。

次に「質問」(query)は、特定の人に対して、特定の内容を問い尋ねることある。例えば、対話中に行われる「なぜそう思ったのですか」、日常的な質問「いま何時ですか」、政治意識に関するアンケートでの「特定の政党を支持していますか」といった質問がこれに当たる。答えるのはこの質問を受けた人である。

最後に「疑問」(doubt)は、広い意味では特定の内容についての「分からないこと」の表明である(例「疑問文」)。疑問は疑念、反論を含意することもある。例えば「消費税率は本当に10%でよいのか」は、実質上「消費税率は、本当は10%であるべきではない」という主張であり、「10%であるべきだ」という主張に対する反論である。この意味では「10%でよいのかどうか分からない」ことの表明ではない。

以上、見てきたように、「問い」には多義性があり、「問い」という言葉を聞いた時に、人は自覚的に整理できないまま複数の意味を想起する。一体どのような意味で理解すればよいのか分からないので、意味の多義性は問い出しの障壁となる。

問い出しのその他の障壁としては、第一に、「問いを挙げること」に対する戸惑いがある。問いの形で表現すべき「分からなさ」、いわゆる「モヤモヤ」がない場合、人は戸惑う。日常生活では、疑問や違和感に向き合う時間や、それらを言葉にする機会は稀である。

では、そうした「モヤモヤ」があれば問いを挙げることができるのだろうか。「モヤモヤ」とは生活のなかで感じる、現実への違和感や分からなさについての未だつかみどころのない感覚である。この感覚を自覚していても、問いに変換するのは簡単ではない。モヤモヤはあるが問いに変換できないという戸惑いは、違和感や分からなさというものが、その本質上そもそも言葉で捉えがたいことに由来している。

第二の障壁としては、問い出しを「したくない」という反発がある。学校での大人数の哲学対話では、哲学対話をする意義自体が生徒に伝わっていないことがある。筆者は最大400人以上の対話を一人でファシリテートする機会が年に一度ある。このような場合、かならず対話すること自体に反発を覚える生徒がいる。問いを出すこと自体、学校教育ではあまりしないゆえ、一般に生徒は問い出しに慣れていない。慣れていないことを外部講師によって強要されている、そのような気持ちが、対話後の感想を尋ねる匿名アンケートに書かれていることが稀にある。

加えて少し特殊な例であるが、人生をテーマにした対話でも、ある種の抵抗感に遭遇したことがある。いわゆる哲学対話として実施したのではなく質問項目(例：小学生の好きな給食は何でしたか?)が書かれたすぐろくを使って人生を振り返るワークショップを

シニア向けに実施し、興味を持った方々に参加していただいた際の事例である。基本的には人生を、少人数のグループごと振り返り語り合うのだが、最後にすごろくに書かれているような質問を挙げてもらうワークを行った。その時に参加者の一人が、人生について「問い」を挙げることはせず、感想だけを述べた。感想からその方が、人生について問いを挙げることを、人生を嘆くことであるかのように理解していたことが感じられた。

第三の障壁として、哲学対話における「問い」が占めている独特なステータスがある。哲学対話における問いは単なる「質問」ではない。例えば「今何時ですか」という質問であれば、質問者と、質問された人がいる。哲学対話の場で「なぜ時間は早く過ぎるのか」を出発点の問いとして採用した場合、問いを生み出した人がその場にも、他の参加者もまた（共感できるかどうかは別にして）自分の問いとして考える。この想定がうまく共有されないことがある。

「問い」はあくまでそれを提出した「質問者」のみにとっての問題であり、それ以外の参加者は解決策を提案するものだ、といった想定で話し合いを進める参加者がいる。そうすると対話の場は、悩める人がアドバイスを求める悩み相談のような雰囲気呈する。筆者が共同主催する哲学カフェでは、以前このような事態がよく生じていた。

哲学対話の場で問いを共有する場合、その問いは全員にとっての問いとなる。共有された問いは、もはや単なる「質問」ではなくなる。問い自体が発話者から独立して存在し、それを聞く／読む人に謎を投げかける。問いを共有してみんなで考えるという想定が理解されていないので、問いが挙がらない（「自分には「悩み」がない、、、」）という場合がある。

3 「問い」についてのドクサ

問いとはこうでなければならぬという思い込みもまた、問い出しの障壁となりうる。一見「そうであるように思われる」（ギリシア語で *dokei*）という思い込みを、ここではソクラテスに倣いドクサ (*doxa*) と呼ぶことにする。哲学対話の「問い」についてのドクサを端的に言えば、「哲学対話の問いは哲学的でなければならぬ」である（ドクサ1）。いかにも哲学らしい問いとは、「存在とは何か」、「万物の根源は何か」、「善いとはどういうことか」といった、世界理解の基盤をなすことがら（存在、万物、善）の本質や根源に迫る問いである。

日常世界に対するみずみずしい驚き、センス・オブ・ワンダーを抱くのは、しばしばこどもである。こどもこそが真の哲学者であり、哲学対話はこどもこそ力を発揮する、といった見解は、こどものための／とともにする哲学の実践者によく見受けられる。筆者もこの点に異論はない。しかし、こどものみずみずしい驚きだけが哲学対話の入り口だと考えることは、若者や大人を門前払いにすることになりかねない。

こうしたドクサは、前述の「問い」の多義性と絡み合っている。問いには、問題、質問、疑問という複数の意味があるが、「問い」は、前述の「広い意味での疑問」、「問う者がわからないところのもの」を直接表現していなければならない、というのが多義性と絡み合ったもう一つのドクサである（ドクサ2）。例えば、「なぜ世界は存在しているのか」のような哲学的な問いは、世界理解の基盤をなす概念について、その存在の原因・根拠がわからないことを表現している。このような様相を呈した問いを哲学対話の理念形とする

ことで、これに当てはまらないものは、問いに相応しくないものとして退けられる。

たとえば、①「街のゴミを減らすにはどうすれば良いか」は、哲学的な問いではなく「問題」である。これは課題解決の方法を問うているにすぎず、問題を解決すれば終わりであり、自明の事柄を改めて問い直していない。②「自由と感じるのはいつですか？」という問いにおける「自由」は、たしかに哲学らしいテーマである。しかし、この問いは「質問」になっている。質問は、回答が分かれば終わってしまう。③「制服なんていらないんじゃないか」は、その裏側に主張がある。これはそもそも「問い」ではないので、哲学的な探求が始まらない。このように、様々な問いが非哲学的なものとして退けられる。参加者のみならず、ファシリテーターもこうした判断をしよう（筆者もかつてそうだった）。しかし、これを入り口にして哲学対話が成り立たない訳ではない。これについては次節で扱うとして、問いの内容と形式に関するドクサ1と2をもう少し分析してみたい。

まず問いの形式に関するドクサ1は③を排除する。なぜなら、「修辞疑問文は問いではない」からだ。例えば、「宇宙が生まれる前には何があったか」は純粋な疑問とみなせるが、③は実質的には疑問文ではない。「制服はいらないんじゃないか」は、制服を着なければならぬというルールへの懐疑であり、「なぜ仕事は辛いのか」は、自らの労働環境の過酷さに対する嘆きである。ドクサ1によれば懐疑や嘆きは、本当は問いではないので、「問い」として相応しくない。ドクサ1はこのように修辞疑問文を排除する。しかし、単なる懐疑や嘆きは疑問ではないから「問い」ではないと、本当に言えるだろうか。「宇宙の始まる前には何があったか」は哲学的疑問と言えるが、これもまた、宇宙が現に存在することに対する「驚き」を表現する修辞疑問文だ、と言えないだろうか。もしそうなら、修辞疑問文であることは、問いとしての不適切性の条件にはならないだろう。

ドクサ2は内容に関わっている。日常的な世界理解の基盤をなすような自明の事柄について改めて問い直すのが哲学的な問いである、という思い込みである。これは、「哲学の問いは、世界への驚きからのみくる」、「こどもが発する純粋な問いかけこそ哲学的である」などと表現することもできよう。哲学的な問いの起源を驚き（タウマゼイン）に求めるこのような立場を、ここでは「驚き一元論」と呼ぶことにする。この驚き一元論には、以下のような伝統的典拠がある。

「なぜなら、実にその驚異の情 [タウマゼインのこころ *pathos*]こそ智を愛し求める者の情なのだからね。」（プラトン 1966:155d）

「けだし、驚異することによって人間は、今日でもそうであるが、あの最初の場合にもあのように、知恵を愛求し [フィロソフェイン 哲学し] 始めたのである」（アリストテレス 1959: 982b13）

確かに古来、哲学の始まりは驚きであると言われている。プラトンは、驚きをパトスの一様態としており、訳者の田中美知太郎は、このパトスを「こころ」と訳している。パトスは動詞 *paschein* に由来する名詞である。*paschein* は「苦しむ、耐え忍ぶ」が原義であり、こころが受ける刺激によって生じる苦しみの状態がパトスである。Giulia SISSAによれば、特にプラトンでは、「パトス」ないし、類語の「パテーマタ」が用いられるのは、魂の癒しがたい病理的な性質を強調するときである⁽⁵⁾。パトスは悩める状態の心と言い換え

ることもできよう。

哲学カフェや学校での問い出しで挙げられる問いの多様性を前にすると、哲学的「問い」を生むパトスには、驚き以外のものもあるのではないかと思わされる。実際、ヤスパーズによれば、哲学の始まりとなるものはそれだけではない⁽⁶⁾。

4 哲学対話における問いとはなにか

一九四九年のラジオ講義を元にした『哲学入門』においてヤスパーズは、哲学の始まりにあるパトスを、驚き以外へと拡張している。

総括して申しますと、「哲学すること」の根源は驚異・懐疑・喪失の意識に存しているのであります。あらゆる場合において、「哲学すること」は人間を襲う衝撃をもって始まります。またそれは、困惑の中からある目標を探り出そうとするものであります。／プラトンとアリストテレスは驚異から存在の本質を探究しました。デカルトはどこまでいっても果てることのない不確定の中に、いなみがたく確実なものを探究しました。／ストア学派の人々は現存在の苦悩のうちに魂の安静を探究しました。（ヤスパーズ 1954: 37 人名表記のみ若干変更）

ヤスパーズは驚き一元論を超え、そこに「懐疑」と「喪失の意識」を加えている。哲学史上、懐疑を出発点とした哲学者の例としてデカルトが、喪失の意識を起点とした哲学の例として古代のストア派が挙げられている。ヤスパーズは、驚異、懐疑、喪失それぞれを以下のように関連させ、苦悩を生み出す「限界状況」という概念を導入する。

天体の運行のような、原理が知られていない世界の現象に驚きを覚え、現象の根底にあるものについての無知を自覚する人間は、無知を埋めるための「知識」を作り出す。歴史的にはここから哲学が生まれてきた。世界についての知識がこうして積み重ねられてゆくが、今度はこの知識を批判的に吟味することで、その確実性についての疑いが生じてくる。他方、こうした対象についての確実な認識に至ろうと努力するとき、人は自分自身について、「私の目的」、「私の幸福」、「私の健康」については考えない。そして自分自身のことを意識するようになると、自分が置かれた状況における自分自身の弱さと無力が意識される。人生において人は自分の力では変えられない状況に直面する。例えば、いつかは死ぬ、悩みを抱えている、何かと戦わなければならない、不運に苛まれている、などといった状況である。自己に襲い掛かり「動揺」させ、自分の無力を自覚させることで「喪失の意識」に人が陥る、このような状況が「限界状況」である（ヤスパーズ 1954:23-27）。

この限界状況は、「かの驚きや懐疑に次いで、哲学のいっそう深い根源」であるが、しかし同時に人々がそれに「目を閉じて生活」し、「逃避」することもしばしばある（同 26）。哲学への入り口は開かれているが、それを前に目を閉じるゆえ「若者」や「大人」は問いを挙げるのに困難を覚えるのであって、懐疑や苦悩そのものが、哲学の始まりにならないということではない。ヤスパーズによれば、こうした状況における苦悩や弱さの自覚もまた、哲学の始まりである。この観点からすれば、「自分の人生に対して嘆きたくない」という反応は、哲学対話の問いを出す上での障害となるものではなく、むしろ始まりに相応しいものになる。また、「問い出しをして何になるのか」という懐疑もまた、哲学

の出発点になりうる。

疑問文が修辞疑問であるかどうかは、もはや「問い」として相応しいかどうかの判断基準にならない。驚き、懐疑、限界状況における苦悩に何らかの仕方で結びついていれば、問いは哲学対話の問いになりうる。驚き、懐疑、苦悩が本人に由来していること、問いが自分ごとであることを、本稿では問いの当事者性と呼ぶことにする。

この当事者性を欠いている場合、その問いから哲学は始まらない。授業で問いを一つに絞ったあと、問いを出した学生になぜこの問いなのかを尋ねると、実はその問いはどこかで聞いたことのある問いだったから出ただけで、それほど当事者性がなかった、といった経験が筆者には何度もある。問い出しが初めての場合は、筆者が具体例を挙げて説明をする（例えば「なぜ勉強するのか」）が、学生は自分の問いが思い付かないので例をそのまま書く場合などがこれに当たる⁽⁷⁾。

当事者性は、その問いがその人にとって「大切」であること、と言い換えることもできる。「大切」は、元来「大いに迫る（切る）」を意味していた（前田 2005）。意識において自己に迫ってくる問いが、当事者性のある問いである。興味深いことに、17世紀に編纂された『日葡辞書』では Amor（愛）は「大切」（Taixet）と訳されていた。これを踏まえれば、哲学（philo 愛、sophia 知）は、驚異、懐疑、苦悩という、「大いに迫る」パトスを抱える者が知を求める営みだと言える。

問いが問う人自身に大いに迫るものであれば、それは哲学の出発点になる。問いは答えを求めるが、その答えはまだ誰にも知られていない。知識詰め込み型の教育では、それぞれのこどもによって異なる問いを挙げてその答えを探求するプロセスは重視されない。産業界のニーズに適合的な人材を育てることを目的とする教育では、個々でバラバラの問いを中心に学びを進めることは非常に効率が悪いからだ。もし哲学対話が単に論理的思考、批判的思考を育てるためだけに採用されるのであれば、哲学対話によって「哲学すること」が生じるかどうかは、おそらく偶然に依存することになるだろう。「銀行型教育」（パウロ・フレイレ）⁽⁸⁾、「掃除ロボットを育てる教育」（G.ビースタ）では⁽⁹⁾、世界に対する「こども」のみずみずしい驚きは抑圧され、表出の機会を失うだろう。

確かに、こどもが本来もっている驚きの力は哲学によって発揮されることは、多くの論者の指摘するところである。しかし、同じことが「こども」だけでなく、「若者」や「大人」にも言えるということは、強調しても良い⁽¹⁰⁾。社会にすでに適応した「大人」の苦悩は、日常の中で抑圧され表出の機会を得ない。社会に適応しつつある「若者」の社会への疑念も、日常的には表現の機会を得にくい。人間は、驚き、疑念、苦しみを経験するが、日常生活でそうしたパトスの感覚と向き合う事は少ない。ヤスパースはそうした状態を「無疑問性」と呼んでいる。しかし、潜在的には、人は悩みを当然のこととして受け入れられず、なんらかの問いを抱えているのではないだろうか⁽¹¹⁾。

なんらかの問いは、まだモヤモヤとして、問いという形をとっていないかもしれない。無疑問な状態とは、そうしたモヤモヤさえも存在していない状態である。しかし、本当にモヤモヤがないかどうかは実のところよくわからない。世の中に対する疑問や日常における苦悩について、対話の場で話す機会がないことが、結果的にそうしたパトスを意識下に潜在化させることになる。対話をすることで、潜在化したものが顕在化することや、忘れていたパトスが思い出されることがある。

特に社会に関する疑問や苦しみに関して言えば、それについて話すことは、単に心の葛藤を主題化するだけにとどまらない。葛藤を引き起こすルールや制度といった、社会の問題にまで光が当てられる。そもそも制服や校則はなぜあるのか、そもそも苦悩を引き起こすような働き方がなぜますます増えているのか。こうした問いはまさに「問題」としての「問い」であるが、自明のことを問い直す、身に迫る問いである以上、哲学的な問いであると言ってよい。その回答は、社会やその歴史についての知識を要求するであろう。それに対する回答まで哲学対話には求めることはできないかもしれない。しかし、哲学対話に求められるのが、自明性を問い直し世界の見え方を変えることであれば、同じ対話の中で回答を与えられなくても良い。

その意味で哲学対話にできることは限定的である。しかし、逆に言えば、そうした問いを表面化させられるのは、対話すること自体に目的のある哲学対話に特有の強みである。なんらかの目的を持った対話は、その目的に直接沿わないやりとりを極力削ぎ落として行くが、哲学対話は、こうした社会的な問いを表面化させる公共的な機能も担いうる⁽¹²⁾。一見、極めて個人的な疑問や苦悩は、それが共有されることで、公共化し、単なる個人的な「悩み相談」以上、驚きに基づいた哲学以上のものになる。

このように、他者と対話する場合、哲学的に考えることは、問いの公共化に至る。とはいえ、こうした問いの公共性は、哲学することにとってあくまでも副次的に過ぎないのだろうか。ヤスパースによれば、驚き、疑問、苦悩といったパトスの感覚を、人は話したい、聞いてもらいたいと思っている。哲学が始まるその源は、パトスの経験についての語りを、人に聞いてもらいたいという欲求、「交わりへの意志」にある。「哲学の根源は (...) 本来の意味における交わりの意志のうち存する (...)」。あらゆる哲学は伝達への衝動をもち、自己を語り、傾聴されることを欲する (...)」(ヤスパース 1954:37)。

哲学することは、言語を使って遂行される。言語は思考を形作る。さらに、言語は他者とコミュニケーションするための手段でもある。言語によって考えようとする衝動は、他者にそれを伝えたいという衝動と不可分である。古来哲学者は、対話や著作によってその思考を人々に伝えてきた。それは学問研究としての哲学でも同じである。論文を書き、学会や研究会で発表するのはその現代的形態である。当たり前のことを問い直すことに面白さを感じる市民が開催する哲学カフェが、ここ 10 年ほどで雨後の筍のように増えている。これは、こうした「交わりの意志」が人々の間に確かにあること、またその一つの顕在化の手段として「哲学カフェ」という方法が普及したことの証である。人々が自発的に始め続けている哲学カフェでは、それぞれが話したいことが問いの形で扱われているはずである。哲学を、自分が感じる疑問や苦しみを共有しそれについて話したいと欲する意志に根差した対話であると理解するならば、哲学対話における「問い」は、世界の根源を問い尋ねる問い以外にも開かれていて良いはずだ。

5 結論

本稿は、哲学対話における「問い」の難しさは、一体何に由来するのかという問いに対して、一定の整理と解答を与えることを試み、難しさの解消の一助のために哲学観を拡張することを提案した。

問いの難しさは、まず「問い」という言葉の多義性（疑問、質問、問題）に起因する。

それは、この言葉をどう理解すべきかがわからないという難しさであった。ついで、「モヤモヤ」がないので問いにできない、それはあるが言葉にできないという、問いを「挙げる」際の難しさがあった。また、「問い」を挙げることに對する反発やためらいも、問い出しの障壁となる。さらに、問いを共有して、それぞれが自分の問題として一緒に考えるという想定 of 難しさがあった。

他方、「問い」を挙げることの難しさは、「問いは哲学的でなければならない」というドクサにも起因する。これは、問う人やファシリテーターも持ちうる。哲学書に出てきそうな問いであるとか、世界に対するこどもの驚きが典型的に示すような問いでなければならないという思い込みにより、ある種の問いは、「哲学的ではない」とみなされてしまう。しかし、世界に対する驚きだけでなく、自分の知識や認識についての懷疑、限界状況における苦悩もまた、哲学の始まりにふさわしいものである。その問いが、自らに大いに迫ってくる問いであれば、「こども」だけでなく、「若者」、「大人」もまた、哲学的な問いを挙げるにふさわしい主体でありうる。

哲学的思考が言語を通じて形成され、言語というものが本来意志伝達的手段でもある以上、哲学にとって伝達は本質的な要素である。驚き、懷疑、苦悩というパトスの感覚を語り、聞いてもらいたいという「交わりへの意志」が、ヤスパースによれば哲学の根源であった⁽¹³⁾。その意味で、哲学対話における共有された問いは、哲学の始まりの場所であり、探求の入り口である。

この入り口から対話の公共空間に入り、場合によっては、潜在化したモヤモヤを再発見したり、それを生み出した社会的抑圧に気づいたり、あるいは、思い込みから解放されて自由になることができる。共有された問いは、そうした苦しみの軽減の端緒にもなりうるだろう。そのようなものとして哲学対話における問いを捉えるなら、さまざまな問いが哲学対話の問いになりうる。パトスと問いが結びついているかどうかを問い、結びついていない場合はそれを結びつけるような問いかけが、一見哲学的でない問いのポテンシャルを掬い上げるだろう。交わりの意志がパトスに根付き、パトスと結びついた問いが対話の中心に据えられ共有されれば、初発の問いがどのようなものであれ、哲学対話は成立するはずだ。

【参考文献】

Barbara Cassin (dir.)(2004), *Vocabulaire européen des philosophies : Dictionnaire des intraduisibles*, Le Robert/Seuil

Olivier Blond-Rzewuski (dir.)(2018), *Pourquoi et comment philosopher avec des enfants ?*, Hatier, Paris

Mattieu Contou, Guillaume Pigéard de Gurbert, *Philosophie : Terminale voie générale voie technologique nouveau programme*, Le Robert, 2020

アリストテレス (1959) 『形而上学』出隆訳、(上)岩波文庫

ユルゲン・ハーバーマス (1994) 『公共性の構造転換 ― 市民社会の一カテゴリーについての探求』第二版、細谷貞雄・山田正行訳、未来社

ガート・ビースタ (2017) 『教えることの再発見』上野正道監訳、東京大学出版会

梶谷真司 (2018) 『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』幻

冬舎新書

- 河野哲也（2019）『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』岩波書店
 篠原一（2004）『市民の政治学 討議デモクラシーとは何か』岩波新書
 高橋綾（2020）「当事者研究から哲学プラクティスが学ぶべきこと — 生きづらさや苦勞を抱える人たちとの対話と探求 —」『思考と対話』vol.2, pp. 13-25.
 田端健人（2021）「子どもの哲学対話のコミュニティ—討議倫理の社会的「共同存在」論—」『哲学対話と実存』実存思想論集 XXXVI 所収、実存思想協会編、pp.29-52.
 土井忠生、森田武、長南実（編訳）（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
 土屋陽介（2019）『僕らの世界を作りかえる哲学の授業』青春新書
 中岡成文監修、寺田俊郎編（2021）『哲学対話と教育』大阪大学出版会
 プラトン（1966）『テアイテトス』田中美知太郎訳、岩波文庫
 堀越耀介（2020）『哲学はこう使う』実業之日本社
 前田富棋監修（2005）『日本語源大辞典』小学館
 増井金典（2012）『増補版 日本語源広辞典』ミネルヴァ書房
 カール・ヤスパース（1954）『哲学入門』草薙正夫訳、新潮文庫（*Einführung in die Philosophie* [1949], Piper Verlag, München/Berlin, 2019）
 ——（2011）『哲学』小倉志祥、林田新二、渡辺二郎、中央公論新社
 吉田幸司（2020）『「課題発見」の究極ツール 哲学シンキング』二〇二〇年
 マシュー・リップマン（2015）『子どものための哲学授業 「学びの場」のつくりかた』河野哲也・清水将吾監訳、河出書房新社

【註】

- (1) 筆者の場合、梶谷（2018）を参考にしてルールを提示している。学校で行う場合は初めての人が大多数であるので、すべてを提示する。哲学カフェの場合状況に応じ、幾つかに絞って提示することが多い。また、シニア向けの講座の場合は、手短かに話すことを強調するなど、参加者に応じて変えている。よく使われるルールのリストについては河野（2019:212-213）を参照。
- (2) すぐろくのマス目に書かれた質問に参加者全員が答えながら、自分の生きていく年代のマスまで進む「哲学対話人生すぐろく」を筆者は2021年に作成した。これについては通常の哲学対話とは異なるので当てはまらない。
- (3) 河野（2018:136-137）は、哲学対話に相応しい問いであるかどうかを確認するための基準を列挙している。堀越（2020）は哲学的な思考をする際に必要な問い出しの方法を、一章を割いて丁寧に説明している（第三章「問いの立て方」）。吉田（2020）は「哲学シンキング」の観点から、問いを集めて整理するというアプローチを採用している。土屋（2019:202）は、対話の前に映画、アート、絵本などの素材の体験の後の問い出しの方法を簡潔に説明している。梶谷（2018:115-144）は問いの難しさにも触れつつ、どのようにして問いを重ねてゆくかを説明している。問いをパトスと結びつけるという本稿の観点と重なる記述もある。またフランスの高校の哲学の教科書である Contou/Pigeard de Gurbert（2020:556-557）では、哲学的な問いの作り方を紹介している。
- (4) 梶谷（2018:60-64）は、「問うことの難しさ」について扱っているが、内容としては哲学対話の出発点となる「問い」ではなく、特定の人に対して質問をする（問いかける）ことの難しさ

である。

- (5) Giulia SISSA, « Pathos » (Cassin 2004 : 902)
- (6) 河野 (2019) は、哲学の始まりを驚きに求め、驚きの結果生まれた一時的な感情、感情を持続させる情念を驚きから区別している。本稿ではパトスに驚きや懐疑、苦悩を帰属させている。驚きが懐疑や苦悩の発端に常にあるかどうかは、本稿の直接の課題ではないが、今後の検討課題としたい。
- (7) 逆に、今まで考えたこともなかったが、この問いを見て途端に「なぜ勉強するのか」が自分にとって身に迫る問いとなることもあるだろう。
- (8) 銀行型教育においては、生徒が金庫に、教師が預金者になる (ビースタ 2017:99)。生徒は知識を入れる入れ物に過ぎない。
- (9) 与えられた環境に適応し続ける、つまり「未知の将来のなかで生き残るスキル」を獲得するが、その環境が果たして自分が「適応すべき環境であり、適応する価値のある環境であるかどうかという疑問」を生み出すことができないのが掃除ロボットである (ビースタ 2017:89)。ビースタは現代の教育言説が大部分このような掃除ロボットを育てようとするものであるとして批判している。
- (10) 例えば (リップマン 2015: 66) に見られる一節は世界に対する「こども」のみずみずしい驚きを強調するあまり、結果的に「大人」が哲学する可能性を過小評価している。
- (11) ここではあくまでも便宜上「こども」、「若者」、「大人」と呼んでいる。小学生が「苦悩」を抱えたり、働く人が世界に対する驚きに打たれたりすることもあるだろう。また高校生や大学生が、驚いたり、苦しんだり、大人が社会に対する疑問を抱くこともあるだろう。「怒り」や「悲しみ」を背景にした、高校生の哲学対話における問いについては、例えば以下を参照。堀越耀介「放課後のきらめき—都立高校での哲学対話」(中岡・寺田 2021, 134)。
- (12) 市民的公共性の歴史的変遷についての古典的な研究としては、ハーバーマス (1994) を参照。近年では、行政主導で市民の声を上げるミニ・パブリックス (市民会議、コンセンサス会議など) がある。筆者も過去にワークライフバランスをめぐる哲学対話を長野市の援助を得て開催したことがある (2018年1月27日「テツガク対話で考えよう、自分らしいワークライフバランスって何?」<https://www.nagano-shimin.net/2017/12/19/> :2021年12月2閲覧)。ミニ・パブリックス概念については篠原 (2004) を参照。哲学対話が関連する近年の事例については中岡・寺田 (2021) 第2部「哲学対話の広がり」を参照。哲学対話の特徴や公共的機能についての研究はまだ多くないが、特に p4c の成立条件とハーバーマスの討議倫理との比較については田端 (2021) を参照。
- (13) この点で哲学対話は当事者研究に近づく。「対話と自己への関係・ケアのための探求」としての哲学の歴史的水脈や現在の実践に着目し、哲学プラクティスと当事者研究を比較した研究としては高橋 (2020) を参照。